昭和49年度

冬山報告

穂高

信州大学山岳会

伊那松本山岳部

SIMAC

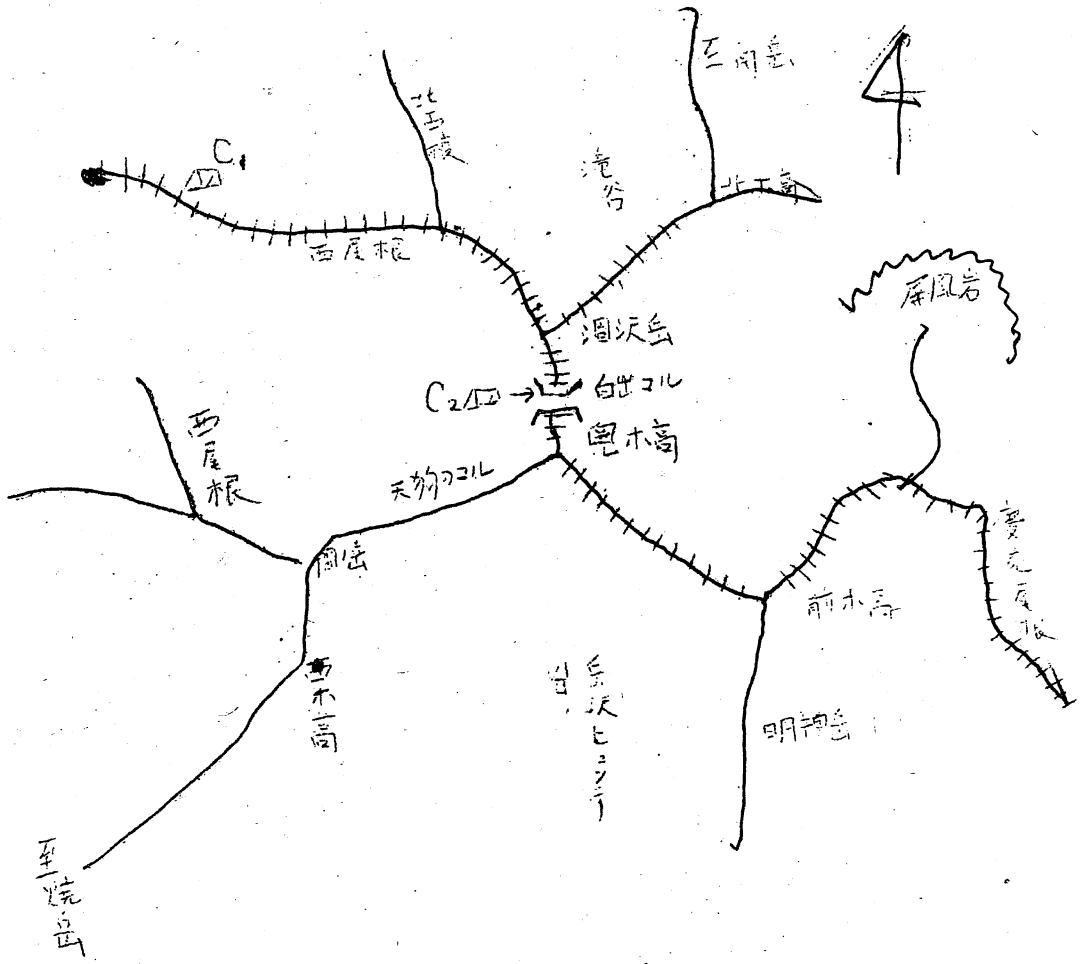
令和[illegible]年度

琉球高

[illegible]大学山岳会

[illegible]琉球大学山岳部

SYNAC



穂高周辺概念図

||||||||| トレースした所。

1. 期間　S49年12月24日 ～ 50年1月3日

2. メンバー及び分係

C.L 服部芳雄　　S.L 中田茂

三班：C. 牧瀬政裕(L.3Ⅲ)，所田信人(MTⅠ)，横山剛己(A1Ⅰ)
炊備：C. 吉田秀樹(L.3Ⅲ)，二宮雅司(L.1Ⅰ)，左山幹太郎(S.2Ⅰ)

相包：C. 福島渉(A3Ⅲ)，古橋孝夫(A2Ⅲ)　藤元治郎(A1.2Ⅰ)

記録：C. 古橋孝夫　　ボ上雅子(A.2Ⅰ)

気象：C. 豊田信行(A2Ⅰ)

医療：C. 豊田信行　村田幸稔(A1Ⅰ)

会計、渉外：C. 須貝克之明(A2Ⅲ)　藤元治郎

総合整備：渡部光則(L4Ⅴ)　中田茂(L.4Ⅴ)

(注) L. 人文学部
S. 理学部
A 農学部
M 医進課程

数字は学年　又は部屋をあらわす。

北尾根隊 L 渡部光則、吉田秀樹、牧瀬政裕、須貝克之明
その他の全員は本隊として 泊沢岳西尾根より入山。

本隊（湯沢岳西尾根より）行動記録

12月24日　終日雪

松本（4:40）— 高山（11:12）— 新木高（15:40）

下界では、もうクリスマスでにぎやかになっているというのに、ひたすら準備におわれて本日入山、しかも雨ときている。
松本より列車に乗りかえの続く限で高山へ。
高山で少々バスのまち時間があり、各人町に繰り出し下界の一時を過したようだった。列車より見た刻以北の山々が印象的であった。

12月25日　雪

新木高（6:50）——— 白出沢出合（10:00）

- デポ隊（畑、清水、豊田、阿田、佐山、大橋、三浦）
  1900m地点デポ
  14時40分に帰天
- デポ回収隊（服部、吉橋、羽田、藤元、中二）
  新木高の残りの荷も取りに行き
  15時　帰天

デポ隊の方はかなりの悪路に苦しめられた。しかしトレースがありかなりたすけられた。樹林帯の中をぬうようにトレースが走っており、キスをかついでの登行はキツイ。回収隊は、タンバコ2個というのに苦しめられるくらいでなんなく2日目を終る。

12月26日　小雪 ～ 晴

白出沢出合（7:00）～ 2400m地点=C1（12:50）

昨日などの行動より本日は、C1まで全装備を運ぶことにする。西尾根の苦しい登りにつけてザックが肩にくいこむ。トレースはあるものの本当につらい。先行者がいて、C1地点の平地はすでに天場として使えず少し上部にて斜面を整地して天パル。高度を上げるにつれて雲はさり、光がさすようになったが風がキツイ。
しかし主稜の方が時々見えたりしたが、実におだやかであった。

12月27日　晴

・デポ回収隊（△△、豊田、1年全員）

C_1(6:30) —— デポ地点(7:20) —— C_1(9:30)

・fix二年隊（△△、服部、榊原、石橋）

C_1(1:30) —— 蒲田フジを過ぎルンゼの上部まで行く

—— C_1帰天(9:30)

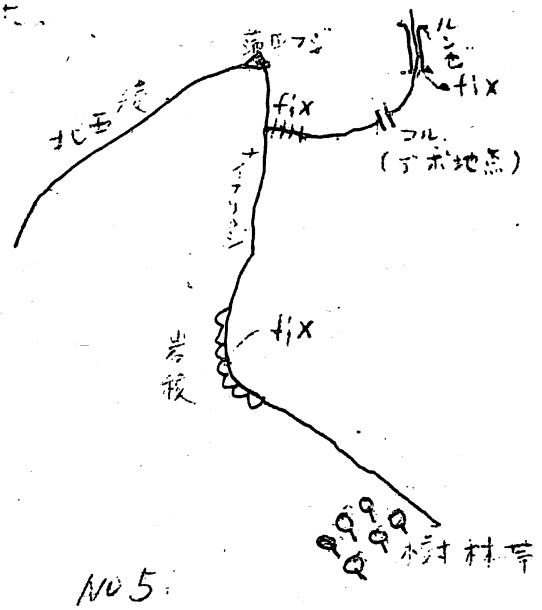
急登を登り詰めたころより樹林帯をぬけ岩稜になるfixの張がいがあったりで少々ヤバイ。そこも登りきると厳しい登りのナイフリッジが続く。雪庇は小さい。蒲田フジを過ぎてまたルンゼの急登が続く。ルンゼはサンクラストしておりさほどの不安はない。登りたルンゼ下部それに岩稜にもfixをはり帰天。

・デポ(全員)

C_1(10:30) —— デポ地点(ルンゼの下の平地)(12:30)

—— C_1帰天(14:20)

岩稜のfix通過などの連続のギコイなさきしりめに見ながら蒲田フジまで行く。天気がよく主稜がそびえて赤い。ルンゼからの上部はそほとでもなさそうである。
デポ地点から榊原、石橋にてfixを少々補足して行った。
△△は少し早く全員が着き帰天の合図をのんびりくつろいでいるようだった。



12月28日 雲り

本日も計画に反してC_2に全装備をもって出発.

C_1(7:00) —— C_2(白岳コル)(11:00)

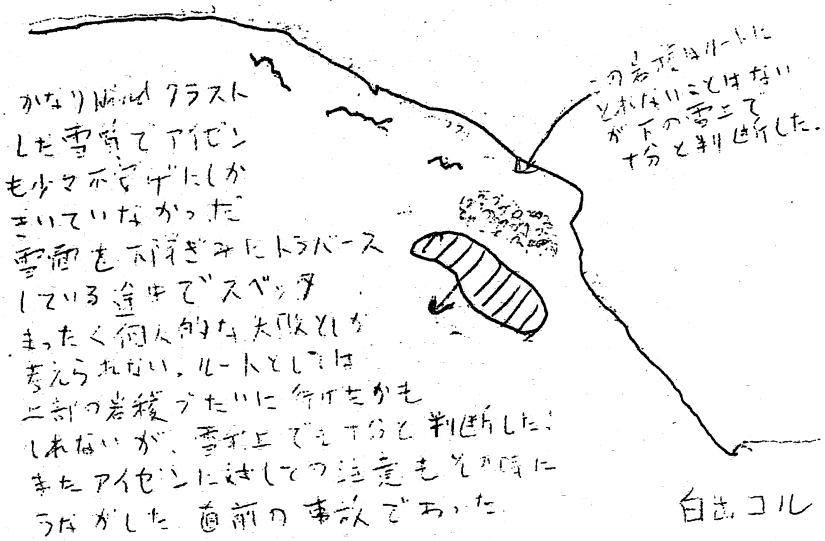
設営後デポ回収に向う.

井上体調悪く中田氏とC_2に残る.

C_2(12:00) —— デポ地点(13:00)

—— C_2帰着(15:20)

ルンゼより上部はさしたる問題はないが風が強くまいるfixを張りながら登る. 個沢を過ぎたんなくC_2白岳コルへ. コルまでは楽な下り. 小々見をくびるコルにはまだんだんはない一張りテントがあっただけそのまますぐ設営しデポ回収に出発. 井上の体調が悪くないたので中田氏とC_2に残る. ルンゼの下降は小々こわい. がなんなくデポ地へ. 帰りはfixを張ったとしてC_2へ……. ところが個沢を下りて横切ってる上級生おわたしくないが かうろして5〜6mで止る。その後C_2まで全員懸垂しC_2へ.



TOPを行った古橋記.

NO 6

12月29日　晴後吹雪

・ﾌｨｯｸｽ工作隊　L. 福島、豊田

C_2(9:00) ——— C_2 帰天(11:30)

昨日のﾌｨｯｸｽ補足などを工作したゴクロウサン

せつ者は、それぞれに沈殿

11時40分ごろ吹雪のなかを北尾本隊が現われる
全員まっ白　吹雪のすごさをものがたっている
ゴクロウサン

12月30日　雲り後吹雪

・北ホ attack 隊　L. 福島、中田、豊田、吉橋

C_2(7:00) ——— 御沢信手前のコルの上部(11:30)

時間のわりには進まずひきかえすことにする

——— C_2(14:10)

御沢岳からの下りは雪質が悪くキシむスタカット、コンテリ
連続、それに吹雪になりこれまた苦しめられる。
また人が多く個番まちいがなもいだ。
下りは少く人が多いのでそれを頼ってしばらく
待機してから帰天した。

・鬼ホ attack 隊
L. 服部、吉田、牧瀬、横貝、一年全員

C_2(7:30) ——— 鬼ホ頂上(9:00)

——— C_2 帰天(10:00)

鬼ホPeakで重野の連中に会う。ワリになんなく行けた。
重野と共に下降してきた。

12月31日　晴　風強し

・北ホ attack 隊
　　△ 阪部、福島、豊田、古橋
　C₂(7:00) ―――― 北ホ attack (10:50)
　　―――― C₂帰天 (12:30)

昨日とちがって雪も定定しておりピッチはかどる。洞沢岳の下りでスタカット、コンテをしたぐらいであとは滝谷側をまいたりする時に少々ひやっとさせられたぐらいである。しかしとにかく人の多いのにはまいる。白馬のコルでもうずなりのパーティーが天バッテいるし、北ホにしてもそうである。北ホのコルに下る前(滝谷側のルンゼ)にfixがあり使用させていただく。帰りはポンカラと白馬コルへ

・鬼ホ隊
　　△ 中田、吉田

中田氏のお供として吉田氏がくわわる。二人でさぞ果しげに登行したようである
　　(記録詳細わからず)

・也鉄は、C₂にて快適な汗を通した。紅一点の井上嬢も元気いっぱい、男子新員に負けずと天下を[illegible]っていたようである。この日は彼女の一人舞台でもあったようですネ……

本日よりせた今年はもうない。あすは未来の昭和50年であり、夜一日集まり酒を飲むそしてラジオに耳をかたむけ……　森信一はレコード大賞を取ったのだ。

1月1日　雪後雪（風強し）

朝はまさにあけようとする時分に吸測器苦しみたす。時刻はハッキリとはしていない。しかしかなりの苦痛をともなっているらしい。何回となくもどしたらしい。胃液のもっとつあ、よくなる様子はない。胃液までもとすようになった。本人は痛みをこらえてが、体をたにうごかしこうげきわるばかりである。お茶を少しそえたがまったく受け一けない。Leader その他上級隊員で検とうが行なわれ、関西山岳会より鬱シュイコをかりる。中岡、服部、吉田、須貝で下ろすことにする。
昼頃にC_2を出発、その日は、途中まで吸測器をかついでおりたが、途中より背負った上で本人に歩いてもらう。その日は、C_1地点にて天幕。

- 朝右腹部に苦痛を感じる。
- 何回となくもどすがーこうによくならない。
- 胃液をはくにおよぶ。体温は別に異常はない。
- 下降してC_1においてもさほどはよくならない。

他のもの4人C_2に残り一夜を過ごした。
上級隊員にとっては一夫の不安のある夜であった。
翌日は翌下降することに決定する。
トランジーバ交通はハッキリとはできなかったが、一応不通でいるらしかった。そして別にゲイテングラートで滑落事故の通信などもあった。われわれには、どうすることもできないことです。

1月2日　晴　雑がつって　雲

C_2（7:30）――――――新小高（11:20）

風はあるが一気に下山する　撤収して Eaden（16人×2日分）（4人×3日分）ガソリン（4缶×3カン）6月末日までの日付けで白石のコム太郎小屋内に デポする。西尾根の fix、C_1、BC（白出沢出合）の Eaden デポを回収していく。途中 蒲田富士下の fix が 20m 程 切断され行もかすに指ちさらされているのを発見 頭にくる。新小高にて先発 鳥居と合流して本日 流れらもここについたことを知る。牧瀬氏は服部氏とともに神田の病院へ行ったとのこと 夜服部氏がもどって来た。牧瀬氏の病名は腎臓ケガとのことであった。（後にハッキリとしたが、腎右炎と扁桃ケガとのこと）夜は、金頭で下山の打ち上げコンパ…
とにかく……　楽しかった。

1月3日

新小高 ――――→ 松本

~~朝一番のバスに乗り~~

朝一番のバスに乗り神田へ。神田では、服部、浅部、吉田、鳥は、別れて牧瀬氏の病院へ行く。他の者は、松本へと移動に乗りこんだ。

北尾根隊 記録

人 渡部、吉田、牧瀬、須貝

12月25日 雪

松本思誠寮(11:00) ——タクシー—— 沢渡(7:00)

—— 木村小屋(11:00)

—— 新村橋(15:00)

沢渡でタクシーから荷おろしされる。冬の二度目なりに久しぶりだ。しきりの青のときの冬山を思い出す。芸人ルはやはり凍結していてピッケル歩では苦労する。上高地までの予定が、張り切る2年目、須貝がトップを快ピッチで飛ばせもって明るい内に徒渉園へ。ここでは天場代を取るということで新村橋を渡った右岸にbivouac。木村小屋で炊事をすませ、漬け物がうまくて雪の降ったり晴れを上げるのに苦労してしまった。

12月26日 曇り後晴(風強し)

T.S(7:30) —— 慶応尾根取り付き(8:45)

—— 8山峰手前のピーク下のコル(16:40)

長野Partyのトレース全く消えてなく、ワカンの個数くるうラッセルに消耗。ダラダラ4人でラッセルするが25kg以上のキスリングではきつく、先頭は荷をおいて空身のラッセル。途中カモシカと出会う。全く逃げず記念写真を一緒に取る。

12月27日 晴

T.S(7:00) —— 8山峰(8:30) —— 5・6のコル(11:50)

—— 3・4のコル(15:30)

8峰ピークでワカンをアイゼンに代える。7峰20mアブザイレンで下降、6峰fix 20m。5・6のコルでは、ベーナーを出してお茶をわかし休む。4峰の登りは5・6のコルを今日出発した長野のトレースがあり、fixを張れば(60、66、40)何ら問題ない。4峰のピークで長野Partyの野口氏の出向かえをうけて3・4のコルへ。2日早く入山していた長野Partyと出合いつく。3峰のルート工作に行っていた長野Partyの2人はかなりキこづった様である。夕食後に長野Pの4・西川氏が明日残りのfixを張ったあと合同す

前ホへ行くことを申し入れてきた。同じ山岳部の仲間として、それに今日の長野Pのfixを使わせていただくのだし、おそ2年目以上のメンバー構成を考えて何ら問題なく了解。
雪の鬼又が眺められる今日一日 一本取るとどうしても、前ホ東尾根 目でルートを追ってしまう。北壁は氷で一面ものすごおおれ、長野Pの頭初計画した右岩稜(中止した)よりも難しそうに見えた。
雪の鬼又の谷は、夜半より冷え強くなり、起きて4人でひたすら背中でおさえてたえるが、明け方近くとうとう新品のエスバースティントのフレームの雄目のアルミ部分が折れてしまった。これからはテントはたよれず、雪洞を掘るよりしかたがあるまい。

12月27日 雲り(風強し)

TS(7:00) ——— 前ホ山頂(13:00)

3峰fix(3.4のC6より3峰Pまで全てfixを張る)長野P 40、40、40m 張り新分を7時すぎ渡部吉田2名で先行して、40、30mと工作して3峰PKへ。荷を小さく分けて3峰PKへ上げる。下部60m 上部30mはザイルで吊り上げる。3峰PK 完結完了 12:00 前ホ頂上直下明神側へ大きな雪洞を掘って全員入る。(長野、伊那、松本 12名)
渡部、吉田がルート工作中3.4のコルで残り6名で荷をパッキングしキスリング一個強奪してC沢におとす。長野君ほか2名がC沢出合まで追いかけたが、はるか本谷へ流れているので雪崩のこともあり あきらめる。数個、吉田兄弟のシュラーフ、芳子の個装が失なわれたが、他メンバーの個装を寄せ集めて何とかなった。

12月29日 雲り(風強し) 地吹雪

TS(8:00) ——— 鬼ホ山頂 11:00 — 白出コル(11:40)

視界が何とかきくので、我々4名で先行する。途中3ヶ所残置名30m程fix。ほとんど吊尾根稜線上を進む。雪庇はあまり大きくない。鬼ホにつく頃には、ひどい地吹雪とガスで視界きかず、Peakもそのまま通過、白出のコルへ出、ゴンテで慎重に下降、本隊のテントを見つけて合流 喜びあう。 ゴクロウサン!

装備係反省など

致命的にはならなかったが多くのミスを犯してしまった。本隊のうの係が1年生2人という事で、チーフ1人で決め装備表を事前に打ち合わせなかったので1年生を戸惑わせてしまった。以下個々について---

・計画段階

2年目がいなくてチーフ1人で立案したが、1年目との打ち合せが充分でなく本隊の装備把握に欠けた。この意味で2年目の係がほしかった。

・準備段階

- ガソリンは多量のため予約した。
- テントは1週間程前から、穴、フレーム、ポールなどを調べた。
- 準備当日、1年生はよく動いてくれた。ミスといえばEssen係で使用したマジックを忘れたが、他に訂正きっぱなしにしておって、他の係のそういを注意がしかった。
- Essen係と関係するものなどを買いすぎた。

・入山して

- fixサイル不足　あと100m位は欲しかった。
- 大丈夫と思っていたブスが故障した。
- ガソリンは170cc/日人用意したが、15cc/日人不足した。

・北尾根隊の軽量化について

中途半端に終った。可能な点をあげてみると

- ガソリンは米使用を前提とした → 米使用 } ガソリン1人1日
- コッヘルを1つにしておじやにする
- ザイルを9mに1本かえる　・ロープは50mで一本。

乾燥野菜

I、乾燥野菜導入までの経過

我部として、今回の冬山において、初めて乾燥野菜導入による冬山Eddsを試みた。以前までは、野菜、肉をいためラードとマーガリンで固めるというペミカン方式に専念していたが「ペミカン方式では軽くならない」という声が、私をはじめ少なからずあった。乾燥野菜の効用については、時別なactivityなどしておいて商品化されたジーブズ等を用いたこともあり、多くは認めるところであった。

しかしながらそれらは、価格が高く、我々学生山岳部のhillに使用できず、今回は自分らの手で作ってみようということになった。幸いにも御好意により農学部の乾燥機の使用を許され実現されるにいたった。

II、乾燥野菜の作成方法

〔材料〕ニンジン、玉ネギ、ジャガイモ

〔手順〕

i. ニンジン、玉ネギは皮をむき、ジャガイモは汚れを落としただけで、スライス状にうすく切った。

ii. スライスに切ったものを野菜の繊維を柔かくするようにゆでる。ジャガイモ、ニンジンは食べられる程の固さまで。

iii. ゆでた、たものをよく水を切りアルミホイルまたは平べったい皿に一面に並べる。並べる時は多少なり重なってもよい。

iv. 一面に並べたものを、通風乾燥機に入れ70°～85°Cに保つ。この時絶対に100°Cを越えさせてはならない。ニンジン、ジャガイモで3～4時間、玉ネギで5時間ぐらいである。

III、自家製乾燥野菜利用による結果と諸問題

(1) 今回実施するに当たり、二度試作を試みそれにおいて気づいた点は以下の通りである。

- 重量は生重に比べ玉ネギで1/13 ニンジン1/11 ジャガイモ1/9となった（この変化は乾燥程度によって大きく異なる）
- 乾燥温度は80°C前後が最適であり70°C以下ではほとんど乾燥せず腐敗の恐れがあり90°Cを越えると焦げつきやすい。
- 陶器皿、アルミホイルに焦げつくものがありよい改善方法がなくむだは仕方がない。
- 体積においても1/5のコンパクト化ができる。

(2) 実施結果

	生重	乾重	乾重/生重 × 100(%)
玉ネギ	20.0kg	1.1kg	5.5%
ニンジン	18.0kg	1.3kg	7.2
ジャガイモ	17kg	3.4kg	20.0

玉ネギニンジンは外皮のついたままの重量であり、つまり実質的な減量はもっと少なくなる。即5%は高くなる。

(3) 問題点と反省点

- 予想された以上に作成に労力がかかった。
  16人 × 18日の分量ということで乾燥棚2台をつくった使って丸1週間かかった。
- ジャガイモはゆですぎると形がくずれて乾燥段階でこわる
- 一様に広げても乾燥が同時に全てにわたって行なわれず表面、周辺部が早く乾いて中央部が乾くころは焦げつくことがある。
- 乾燥野菜は軽量化、コンパクト化にすぐれておりまた味についてもさほどの問題はない。

IV、今後の利用について

- 乾燥野菜はその利用効果は大きく今後利用するとよい。
- 作成段階において時間と労力がかかるのでそれにみあった準備期間をもつこと。
- 作成方法について生ゆで方と乾燥時間の相関関係、並べ方と乾燥程度等研究、改善の余地が残ってある。

気象係

今回は1)1日の最低、最高温度 2)地上天気図 3)朝の南方天気図の3つを行なった。
結果としては1)は温度計がこわれてしまい用をなさなかった。2)は一年全員とも一応書ける段階までは来ているが今後2年として指導する立場としては不安があるより一層の努力がのぞまれる。3)については作図してC.Lの判断にたよる形になり他の者の気象に対する無かんしんの現われて今後全員にもっと詳しく知ってもらいたい。

今回も例年多く問題になる力ぜが一番目だった。したがって主食については見てもビリン系ばかりでありアレルギーの人にとっての配りかたをもう少ししてもよかったのではないかと思う。地図の使いかたについてはあるがサルファ剤しかなく、これを盲腸に使用していた用に思う。もう少し入山前に薬品と対する注意をうながすようにしたい。今回感じることは薬品をそろえるだけでなくもっと基本的な医学知識というものを全員が身につけたいと思うとともに、入山前の各人の健康管理を重視してほしい。

各人の反省などいろいろ出してもらったが多数の一年部員については今回の山行にものたりなさをもらしているが、次後その他が年比較にすた向いただけでありそれはそれとして各人がこの山行の意義をみつけ出してほしいものです。また上級生においてもそれなりの考えなどがあったようですが合宿という点より一年部員の考えは一考の余地があるように思います。

記録係より

今合宿テーマソング 森信一「北帰路」
替え歌 駒作一つ
信大山岳部哀傷歌（只し4年目以下歌うこと禁ず）
作詞 渡部光則、S49、12、30、穂高岳白出のコルにて

冬に山行く　男のあわれを
あなたは　きっと　知らないでしょう
毎日　吹雪く　冷めたい雪に
ほほを打たれて　泣いてる私、
寒いから　お入りよと　後輩にすすめられ
テントに入ったけど　なお寒い心
私は里に下ります　いじける山を後にして

信州大学山岳会、伊那松本山岳部、記録係

No 17.